

ナンダコット登山をふりかえって

～浜野正男氏のお話から～

鹿野 勝彦



以下は、十二月三日に行なわれた青年懇談会主催の第二回インドヒマラヤ研究会で、表題のようなテーマで浜野正男氏にお話いただいた内容の要旨を主催者側でまとめたものです。この研究会は、十一月十九日に開催の予定で、会費各位へもご通知したのですが、当日は国鉄・私鉄のストライキのため中止となりました。そこで十二月三日に変更して行ったわけですが、連絡の時間も充分なかつたかと思ひますので、『山』の紙面をお借りして、要旨のみを記すことにいたしました。なお、当日は堀田弥一氏も参会され、補足説明をいただきました。出席者二十四名。

もう四十年近く昔のことになるので、どこを通過してどう登ったというようなことは一応記録や写真もあるでしょう、当時のようにヒマラヤを考慮、どんな準備をしていったかというようなどを中心にお話したい。

まず、なぜナンダコットという山を選んだかということだが、これには当時のヒマラヤをめぐる情勢から話さねばならない。一九三〇年代といえば、ギリスのエベレスト、ドイツのナンガ・パルバット、アメリカのK2といった具合に国をあげての大遠征がさかんだったわけだが、これに対してライオン・エクスペディションもさかんになつてつあつた。ガルワルという地域は主にそういう小遠征隊の対象だったわけだ。

一方、日本でもヒマラヤに目がむきはじめて時代で、早大や京大を中心に、ヒマラヤの巨峰を目指して極地法や輸送の問題などをしきりに研究していた。しかし、われわれ立大の場合は、そういう大きな山へははじめから焦点をおくより、少々低くても、とにかくヒマラヤを実地に踏むことを考えた。そこでガルワル、ということになった。当初は奥平昌英が主となってナンダ・デヴィを目標とし、シプトンの一九三

昭和50年(1975年)
2月号(No. 356)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)
定価一部 100円

目次

行事・本文

- ナンダコット登山をふりかえって
～浜野正男氏のお話から～
.....鹿野勝彦...(1)
- 『山岳』編集者交代にあたって
.....望月達夫...(2)
- 中原繁之助氏逝去.....(3)
- 中原繁之助氏へ名誉会員章を
手渡す.....津田周二...(3)
- 急性ウイルス性肝炎の予防に
ビタミンC摂取を...松田雄一...(3)
- 紅葉の中房温泉にて
第5回現地支部長会議開かる!!
.....浦生明彦...(4)
- 第13回<この一本展>①.....(4)
- 丹沢集中登山印象記②
(第313回現地小集會)
.....河野幾雄...(5)
- 随想
休山記.....藤島敏雄...(3)
- 足立正夫と近藤実.....田口二郎...(7)
- 図書紹介
『小さな頂』.....望月達夫...(8)
- カラコルム 吉沢一郎古稀
記念文集.....松田雄一...(9)
- その他
第15回登山技術講習会のお知らせ(5)
- 女子事務員募集.....(6)

四年の記録などを研究した。その時、苦心して翻訳したものを含んでもっているが、(日本語に訳された本もでてくるはず)それによればリシ・ガンガから内院へのアプローチが途方もなく困難なようだ。それだけに内院に入った時の彼の感激は大変だったようで、エーデルワイスや名も知れぬ草花が咲き乱れ、カモシカが人間に珍らしうに近づいてきたりすると、とにかく文調の描写があったけれど、とにかくこれではやはり無理だ、ということになった。

そこですぐ南のナンダコットに目をつけた。この山の資料としては、アルバイン・ジャーナルのロングスタッフやマムの一九〇五年の試登の記録が唯一のもので、それ以後は、なにしろ巨峰中心主義の時代だったから対象とされるわけではなかったらしい。ロングスタッフは六、四〇〇mまで登っているが、マムの写真もあったと思うが、たった一枚の写真でルートを検討し、登頂できるという確信をもっていた。実際、ほぼそのとおりのルートで登頂できたのだが、それでも実際の氷河や山頂をはじめて目の前にした時は想像していた以上の強い印象に、ショックを受けた記憶がある。

ところでこういった資料漁りは、虎の門にルウムがあった時代のことだが、ルーマの図書室に鍵をかけて極秘にやったりした。英文を読んですぐわかるような力もないので、二世を連れていってタイプを打たせてもらい、日本語に訳すといった廻り道をした。ヒマラヤのどの山を狙っている、というのを他の大学などに知られまいとしてやったことで、対抗意識というよりもむしろ絶対的な隠密行動を強いられていた。立大が行くというニュースが突然でたことで、あるいは生意気だとか、抜け駆けだとか、いわれたかも知れない。

とにかく、われわれとしてはいい目標を選べた、ということが成功の鍵となったのではないかと、私は思っている。アプローチが短かく、山の規模も手ごろで、小人数の隊でも充分こなせる対象だったという点で、ヒマラヤ初陣のわれわれには適当だった。もし、ナンダデヴィだったら、むずかしかったろう。リシ・ガンガのアプローチだけ考えても、無事にこなせたかどうか疑問である。

直前の二十五日に登頂している。そのニュースは、しばらくしてロングスタッフのコールを越えて、マルトリまでおりてきてポリスに捕まっていたティルマン隊の隊員とシエルバがいてマルトリのポリス經由でわれわれの耳にも入った。ナンダコットを登っているとナンダデヴィはいつも目の前に、それも一〇〇〇mも高くそびえていた。連中もあれを登った、偉いんだ、われわれもなんとしてもやらねばならぬ、という執念を、ナンダデヴィはかきまててくれた。

それにしても、ナンダデヴィは一九三四、三六という積み重ねが効いたと思う。一回だけでは駄目で、リシ・ガンガの突破から登頂まで、全体としてのコンビネーションがよくとれていたのが成功の原因だろう。

当時の準備の話に移ろう。費用は全部で、当時の金で約二万円ほど、隊員は毎日特派員の竹節氏を含め五人。当時としてはかなり新鋭の物を作ったり、たまたでもらったりした物もある。特許でもっておけば、もうかつたかも知れないようなものもある。

が、大変よかったという記憶がある。乾燥野菜(軍用?)などもあったが、アタック用にはチョコレート(特製のもの)や干杏を使った。チョコレートは食べすぎると鼻血がでるから気をつけるといわれたものだ。後できいたが戦時中に突発的に使用するようになった。それが興奮剤が入っていたのだらう。

装備の話にうつらう。まず、テントだが、当時の冬用テント、とくにベイス用のそれは、ドーム形のアークチックが主流だった。しかし、それはいかにも重量が重いので、われわれはウィンパー型のものにし、ポールの中に藤や竹のフレームを入れて居住性をよくした。またはじめてカマボコ型のテント二張作った。これはフレームの材質に苦労した。藤と竹を一張ずつ作ってもよかったが、結局藤はじめるにはいいが芯が弱く、もどりが悪いので竹の方がよかったようだ。竹は竹刀をつぎ合わせたものを使った。しかし、第二、第三に一張ずつ張ったと思うが、居住性が良く、大変快適だった。

靴は山崎と高橋で一足ずつ作らせた。コバを極度に狭くした細身の靴で、実は今でも底を張りかえれば使える状態で保存しているけれども、大変スマートない靴だった。底はコバとの関係でムガーのみのならべ打ちとし、ベロ皮をつけてゲートルと併用した。このスタイルもわれわれがはじめて使ったもので、後で同じ形のをヒマラヤ靴と称して売っていたようだ。ただし内側に毛を張ったりはしていないただの登山靴である。これにオーバージューズ、アイゼンをはいたわけだが、ポストというところもあって足は冷たく、夕方になると足先から頭までひびくみたいに冷えた。

衣類は今から考えるとずいぶん粗末なものだったと思う。ウールサージの

二重布の上衣とズボンで、上衣のエリをたてるとびったり首が包めるように工夫してあった。ヤッケ上下は綿のグレンフェル(英国産)をまねて鐘紡で作らせた生地で、せいぜい六十番手ぐらいのものであった。セーター、下着などは各人各様だったが、とにかく寒かった。

帽子はジャージにいまのナイロンのような生地をかぶせて弁慶の頭巾みたいなものを作ったが、暖かく、防風にも役に立った。手袋もジャガーの毛のものにスキー手袋を重ねたぐらいで、衣類については隔世の感がある。アイゼンは門田、ビッケルは門田と山之内で、山之内の方がシエルバ用だった。スイス製のものももっていた。コンロはラジウスだが、ノズルがよく詰って、苦労した。ススだらけになって、いらいらしながら故障を修理するのは辛かった。石油は扱いに便利のように、二リットルぐらいの缶詰にしてももっていた。

マットは、カボック、フェルト、キルクなどで、エアマットはテストをしたが、どうしても空気がもれて使いたげにならず、あきらめた。

ロープは外国製のものと国産の麻のものももっていた。登頂時には、一本のロープに六人全員がたよるといふ、かなり変則的な使い方をした。つまり、トップの掘田隊長とラストの浜野とがロープをつなぎ、間の四人はこれにつかまっただけで、間からいえるのがあまりほめた話ではない。まあ、全員六人が一緒に登ってしまっただからずいぶん大きなステップを切ったし、登頂の時間がなかったということもある。

シエルバについてだが、三人雇ったうち一人は病気で途中で帰って結局二人だけを最後まで使った。その内一名アンツェリンが登頂し、残りのヌルサ

ンはサードとしてベース・キャンプに残した。ポーターは、ドティアルとブティアで、当時はどちらもシエルバの命令で、よく従順に働いたと思う。六十五人の人夫のうち、よきそうなもの十五人を残して途中までの荷上げに使い、さらに二人は第二キャンプの荷上げにも使った。装備などを貸してやれば、かなり高所まで使えるのではないかと思う。

今、個人として全体をふりかえってみれば、やはりナンダゴットというい対象をみつめたということが、成功につながったというのが、私の結論だ。なお、言葉についてだが、大体この地域は、ヒンドウスタンで通じるようだ。われわれは長谷川伝次郎氏を通じて在日インド人のハリハラ氏にある程度習い、あとは船の中でデッキ・パセンジャーの連中としゃべったり、カルカンターの街中やシエルバと積極的に機会をつかんで話すことで、ずいぶん上達したと思う。

今回JACでナンダグレイの計画があると思うが、ガルワルは、この四十年ほど日本からは誰も入っていないし、谷は深く山は切りたてていて、ティルマンがいうように、ヒマラヤでももっとも美しくアルプス的というところなのだから、問題点や危険に対する研究、調査を充分にやった上で、おおいにやってほしい。そのため、二、三気のついたことを述べておく。

まず、ナンダグレイは他の山とちがって、アプローチが大変だ。とくに内院へ入るには、リシ・ガンガ経由、ゴリ・ガンガ経由、ビンダリ氷河経由の三つのルートが考えられる。このうち多くの隊が使っているのがリシ・ガンガだが、これはとにかく大変なところだから、もしこれをとるなら、輸送の方法をよほど研究する必要があるのだらう。

う。その他のルートの方が、輸送はすつと易しいが、内院へ入るにはロングスタップコルをこえなければならぬから内院に入る下降部分がむずかしい問題だ。あとは、やはり主峰と東峰の間の稜線が技術的にかなり困難だと思いう。風に対する配慮も必要ではないかと思う。

『山岳』編集者

交代にあたって

望月 達夫

近年『山岳』の発刊が遅れがちとなり、去る三月に出すべき68年号もようやく年次晩餐会に間に合うような始末で、編集者としては誠に申し訳なく思っている。ところで私は、かねての懸案にしたがって、この68年号をもって編集者を退き、69年号から新しい編集者に引継ぐこととなった。文字通り肩の重荷がとり除かれた思いを、しみじみ覚えるのである。

顧ると私が『山岳』の編集にたずさわったのは昭和二十四年刊の44年1号が最初で、まだ私が三十五歳の時であった。その後仕事の関係で神戸に在勤した期間およびその直後に刊行された49、50、51、52年号は直接タッチしなかったが、44年1号から68年号まで約二十五年間編集にたずさわって、私さか感慨なきを得ないと思うと、いささか感慨なきを得ない。私の人生で二十五年も続けた一つの仕事は、これ以外に見出せないものである。

昭和四十一年夏、私の職業が非常に多忙となった時、理事会に対して後任者の選定を懇請したが、適任者が求められぬままに経過し、やむなく倉知敬中島寛君らの援助を得て編集を続けざるを得なかった。三年にわたってよく尽力してくれた中島君は、後継者とし

て極めて適任であったが、たまたま彼はエベレスト南壁隊の主要隊員となつて亡殺されたため、それが終わった時点で引継ぐ手はずになっていた。ところがエベレスト遠征が終了し新しい職場外での調査に編集責任は年々二、三回は海外での調査に編集責任を負わせ、そのうちにもゆかないので、後任者の問題は再び暗礁に乗り上げてしまった。

幸い昨年頃から近藤信行君という好適な候補者が現れた。68年号もほとんど同君が作ったようなもので、次号から彼に編集の責任を負ってもらうことが出来ることとなった。『山岳』刊行は会場の多くの仕事のなかでも、最も重要なものの一つであることは多言を要すまい。私はよい後継者を得たことを喜んでいると同時に、同君に期待するところは極めて大きい。それにしても二十五年とは、少し永くやり過ぎた感みなしとしない。会のために良かったか悪かったか、また私の手がけた『山岳』が伝統ある会の機関誌として及第としていたかどうか、私自身の反省は別として、後年第三者によって厳しく批判されるべきものと思う。

去るにあたって私はまず第一に、執筆された極めて多くの会員、会友諸氏に深甚の謝意を表したいと思う。この二十数年間、執筆された方々の数は克明に数えたことはないが、無論何百人に達しているよう。原稿を頂いた当時はいちいち札状を認めてはきたが、ここで改めてその全ての方々に厚くお礼を申し上げたい。その間の『山岳』にも見えるべきものがあるとするなら、それは主として内容を担って下さった執筆者の賜であるからである。

最近の賜号を除いて、私は大部分を全く唯一人で、まさに単独行者のようにしてやってきた。ことに札幌に在勤した昭和35・38年の三年間は、一人で

やる以外に方法がなかったのである。原稿の依頼から始まって、原稿の校訂加来、配列、校正、写真の選定割付け等一切財権一人であった。わずかに広告集めのみずらわしい仕事は、その時々、折井健一、田島汎、松田雄一、竹田寛次、中島寛、伊倉剛三君等に尽力を願った。また表紙のカットを画いて下さった佐藤久一朗、牧野四子、山里寿男、故山下二夫氏にも厚くお礼を申述べたい。

今後これには新しい編集者が新しい構想のもとにやられるはずだから、私からなんかいことは極力避けたい。ただ発刊の遅延はなんとかして回避し、できるだけ年度内発行をはかって貰いたいと思う。また万一求められる

中原繁之助氏逝去

本会名誉会員中原繁之助氏は病氣療養中のところ、十二月十五日未明逝去された。享年八十一歳謹んで哀悼の意を表する。葬儀は大阪市内の顕孝堂でとり行なわれ、本会から生花をお供えし、参列した今西会長が弔辞を捧げた。

氏は明治四十四年、榎谷徹蔵、大月鶴藏両氏の紹介で入会。会員番号二六七番。昭和七年、八年、十六年、二十二年理事、二十一年、二十四年評議員として会務に尽力され、昭和四十九年十一月名誉会員に推挙された。

中原繁之助氏へ 名誉会員章を手渡す

(前略)
年次晩餐会において中原繁之助氏

ならば、多少経験を積んだ者として、応分の助言、協力をするに吝かでない。また過去編集の途上で感じたことはすでに一部は書いたことがある(『山』三一九号、二五九号、二九七号、三〇二号)から改めてここに繰り返さない。最後に私は重ねて、今後とも会員各位からの『山岳』に対するかわることのないご協力とご支援を願ってやまない。それなくしては優れた会誌はできないと信ずるからである。
(一九七五年一月十一日記)

休山記

藤島 敏男

▲登山者はいつまでも丈夫でいく

の代理として名誉会員章を受け取り、帰神早々本十二月九日、目下入院中である夙川の香雪病院を訪れ、直接手渡しに参りました。中原氏の病状はさらに悪く、ほとんど口もきけないような有りさまです。腎臓の悪化が甚しく、腹が張ってひどく疲れれるとのことでした。名誉会員章を大変な喜びで受け、きけない口で「有り難う」とかすかに声をだし、手を合わせて嬉しさを表現されました。これほど喜びられたことは本当によかったと私自身も嬉しい思いが致しました。

医者の話ではあと一週間か十日ももてばと考えるならば、残念ながら寿命がきたと考へねばならないようです。それにしては生前間に合った事を本当によかったと思えました。家族皆さまから山岳会の諸賢によろしくとのこと、以上ご報告いたします。
昭和四十九年十二月九日
津田周二

今西錦司様

になつても山に登れる健康を保っているのが、本望である筈だ。いままも毎月のように山に登っている僕は、この様なことであるが、私が書いたのは昨年六月はじめである(『山』二五九号、二九七号、三〇二号)の終わりに八幡平の西、玉川温泉から榎森をへて、打当内までほとんど終日、あまたこんな深林が残されていふたかと思うような、榎の原生林を歩いた。そして七月の下旬から岳麓御殿場でヴァカンス入り。一切の郵便物を局止めにして俗社会と絶縁。涼静緑を満喫しながら草刈り刈込み、さかんな焚火、いづれも日頃住んでいる東京村大字六本木の里では味えないことをたのしみ、その間には秩父宮別邸で催された三峰窯陶作りの会にも参加、わが世の春ならぬ夏を謳歌しつつべつたり五週間、これでも西欧流のヴァカンスに比べれば短かいと嘆いていたところ、体内にひそんでいた兵が突如むほんを起し、九月下旬に胃袋三分の二切除、百日におよぶ滞院生活に十四Kgも体重がへって、敗残の姿で師走の十四日寝返り戻った。日常放言三昧、言いたい放題でやってきた報いかもしれないとおもふ。

幸いにして酒神バツカスとも、ニコチン姫とも縁切りの憂目は免れたとは言え、体力果して旧に復するや否や、甚だ心許ない。直接間接に耳にした胃カイヨウ経験者の談は、手術後一年にして早池峰山に登った人あり、四年にして槍ヶ岳に登った人ありとさまざまだが、いづれも私よりは年少の人達である。私が近年、行をともにしてきた山仲間六、七歳若い友達から、まだ六十歳をやっと超えた若人、あるいはさらに四十台の登りざかりの連中と比べて仲間に入れて呉れることは間違いないが、あと一、二年休業すると私は八十歳ということになる。

八十歳にして山登りから足を洗うといつても、それほどおかしくはないが、八十歳からの再出発はどんなものであろう? しかし私は望みなきにあらずと期待をしかけているのである。随分うちこちの山をたたくさん登ってきたが、いづれその内に登ってやろうと、心の中に温めてきた山がまだまだ残っている。回復をまつあいだ、それらの山々のことを私は心の中であたためつつけてゆくであらう。

かつて拙著の序に「私の山登りは、いつ終止符をうつか、自分にもわからないが……」と記したが、その時点では七八歳にしてピリオッドを打つだろうなどとは、夢想だにしなかった。一、二年の後は、この休山記が、廃山記あるいは終山記に代ってしまふか、還山記あるいは復山記、辰山記を綴り得るか、事態ははつきりするであろう。それまで私の山あるきは当分お休みということにしようとおもふ。
(一九七五年一月二日記)

急性ウイルス性肝炎の 予防にビタミンC摂取を

ネパール・ヒマラヤ地域で急性ウイルス性肝炎が流行しており、気をつける必要のあることは、『山』三三三号にて一九七〇年東京工大ヒマラヤ遠征隊医師赤井寿紀氏が、ヒマラヤ訪問者への警告と題して、注意を喚起しておられるが、その後も長期ネパール滞在などにこの病気になるケースの多いことを耳にし、憂慮していたが、一九七四年の日大ヤルンカン遠征隊から、下山の途次、三名が発病し、帰国後も長期にわたり入院治療している患者は登頂隊のメンバーを含み、高所

で極度に疲労したものに多く発生している。登山隊としては、果して行動中の栄養が充分であったかどうか帰国後も種々と検診を行ったが、九月十四日付朝日新聞「声」欄に、佐賀市の大学助教授、村田晃氏が、つぎのように流行性肝炎の予防法を述べておられるので、参考のため紹介致したい。なお前記赤井医師の警告文の中にも、予防と感染した場合の処置について詳しくのべられているので併せてご検討戴きたい。

一部の患者は慢性肝炎、肝硬変症、肝ガンと進むこともあるので肝炎を軽視してはならない。
〔編者注〕上記の村田助教授の意見に異議のある方は、編集部へご意見を寄せ戴けますれば幸いです。

紅葉の中房温泉にて 第五回現地支部長会議開かる!!

信濃支部担当にて十月十二日(土)から十三日(日)にかけて、日本アルプスの中腹にある二百年の歴史を誇る名湯、中房温泉(会員百瀬孝氏経営)は山峡の出で湯にして名高く、裏山や谷間など至るところから湧出する源泉は、山の山湯として信州随一、しかも深い溪谷を色どる紅葉の美しさはなんといっても中房ならではの味わうことができない。

この現地支部長会議が信濃にふさわしい有意義な集りに、という念願のもとに奥原支部長を中心に準備が進められた。総務、企画、渉外、設営、記録、受付等、参加二十名の支部員がそれぞれ担当、国鉄大糸線有明駅前交付(浅輪、藤沢)係案内により、駅前より中房温泉行のバス利用。正面に有明山を眺め、安曇平を横切って中房川の深い谷間に沿って走ること約一時間半、そして中房の宿に到着と設営係(原、中野)それぞれ部屋に案内されていた。私ども一行(高山顧問、甲乙女、小木曾、百瀬(各理事)車の着いたときは、上高地山研より伊倉常務はいつも着かれ、あれや、これやと準備内閣のたぐいであり有難かった。織内副会長、北海道支部の平野さんの方々もすでに見えておられ恐縮した次第。早速、板倉、伊倉常務さん方と準備打合せを行う。その間、東京、富山、宮城、岐阜、関西、秋田、山形の各支部の方々、島越後支部長北陸廻りにての到着を待たず、現地支部長会議が織内副会長の挨拶から進められ、議題は会費の値上げの件ならびに創立七十周年の記念旅行事などを中心に話し合いがなされた。

出席は今西会長、織内副会長、高山顧問、本部から板倉、伊倉、村尾さん(出席予定の山崎さん、南アにおける早大の遭難事故のため欠席の連絡あり残念)それに集會委員の若い辻、東原さん、北海道支部をはじめ、越後、宮城、富山、秋田、岐阜、関西各支部ならびに信濃正副支部長出席。

つづいて午後六時より広間にJACC会旗を中心に信濃支部旗を正面にした会場に四十数名の出席を得て小集會が板倉常務の司会により開会される。今西会長の挨拶、地元奥原支部長、宿主人(百瀬支部常任評議員)の歓迎の辞、長野県ならび地元穂高町にかわり支部渉外早乙女理事よりそれぞれのご厚意の報告がなされた副支部長より祝電の披露がされた。高山顧問の音頭にて乾杯につづいて宴席に入り、出席者ひとりひとりごエモラスを交えあはれあい、うちに終り、まずトップバッターに若い信濃支部の方々による、ふさふさの唄、安曇節からはじまり、つづいて各支部からそれぞれのお国自慢がとびだれ、大いに歌い、大いに話した。山の静かな温泉地における小集會はまことになごやかなもので、夜のふけるのを知らず尽きない一夜でした。さて、二日目、全員六時起床、朝食を済ませ七時出発の山行はA、B班に別れ、A班は北ア燕岳のピストンコース、信濃小木曾リダー。B班は燕岳より二泊三日の行程にて表銀座コース、町菅大天荘(泊)―西岳―槍ヶ岳―槍ヶ岳山荘(泊)―槍ヶ岳―横尾―徳沢―上高地山岳研究所、支部百瀬(リ)―1。A、B班とも全員無事山行を終る。

なお、記録係、SBC小林理事撮影記念写真近日お届け致します。以上が今度信濃において行われた第五回現地支部長会議ならびに小集會のもようでした。今西会長さんをはじめ本部の方々、宿の百瀬さんご夫妻、なごりに会員のみなさまに心からお礼申し上げます。(蒲生明登)

出席者(順不同)今西錦司、伊倉剛三、浅利欣吉、蓬田時男、織内信彦、岡部みち子、熊田宗次、佐藤兼治、伊達篤郎、高頭祥八、高橋憲二、北林毅、荻谷三枝子、東原隆、平野明、辻林嘉鶴子、福田光子、藤島友、藤井洋、山川力、吉田久兵衛、村尾雄二、野島福三郎、板倉勝正、堀内章雄、高山忠四朗、佐藤貞、百瀬孝、百瀬一茂、奥原教水、浅輪幸久、塚本茂樹、蒲生明登、早乙女綾久、井口謙司、金子盛二、小林忠治、市東貞雄、藤沢次、小木曾章男、中野和郎、原喜彬、西牧康、中島忠、上条岳人(山崎安治)

なごに限る。本日持参した表題の一本も、目録にも載せておらず、無造作に棚ざらしになっていた。しかもワツではないかと思われるほど安かった。この写本については「山岳」第三十一年一号に笹谷良造氏が「天保五年の大台登山記」と題してくわしい解説を付し、その全文を発表しておられるからいまここで小生が述べることは一つもないが、笹谷氏はそれを昭和九年末、和歌山県立図書館所蔵の写本によつたと記されている。和歌山図書館本は「嘉永二年己酉暮春雪平野氏」と末尾にあるが、小生所蔵の写本の末尾には「万延元元庚申六月膳於若山之貫四時塾上田貞士幹氏」とあり、和歌山図書館本より後の写本である。

山行 山下 久男

『山行』は横有恒著。私が愛蔵しているのは、改造社版で、大正十二年七月三日発行の第三版。昭和二年六月九日、麻布区、古川橋の小川書店において求めた。その時「トルストイの生涯」「三太郎の日記」も入手した。私はこの山行を読んで、心うたれた。昭和三十一年一月四日、私はこの本を携行して、横氏をそのお住居に訪れた。扉に何か一筆とお願ひすると、氏は端座して、無学祖元の詩を書いて下さった。それは「乾坤」の句からはじまる七言絶句である。当時、氏は第三次マナスル登山隊長として、多忙の身であられた。この詩によって、氏はどんな心境であったか察しられて、今に興深いものを覚えて私である。

ドルフ・ライストの本
風見 武秀
ドルフ・ライストの著書は、先年、一九六五年の *Berge der Heimat* *Infel der Welt* に続いて一九七四年今回の豪華本として出版された。

彼はスイス・エベレスト遠征隊員として、登頂しその後精力的に、五大陸の最高峰に登った。彼はインターライケンに住み、彼の部屋からはユングフラウ峰が真近に見えらる。私とは十年來の山友である。彼の愛機はライカが山岳を舞台にして人物の動きを狙ったものに傑作が多い。この地球上で五大陸の最高峰に登ったのは、ナオミ・ウエムラと私だけだという。ぜひ日本の岳人にこの本を紹介して欲しいという。
神谷恭さんを偲ぶ一本
木暮先生追悼「霧の旅」覆刻版
神原 忠夫
木暮理太郎生誕百年祭の記念行事がなかったなら、私にとつて神谷恭さんは遥かな人であったらう。山のことばかりでなく私生活上でも、もっとも木暮さんと親しかった(木暮家の話)神谷さんは、木暮さんの手紙や資料をたくさん保存して、おられ話題も豊富だったので、私の調査にどれくらい役立つかわからない。昭和十九年といひひどい時期に亡くなられた木暮さん。そして逸早くその追悼誌をだしたこの「霧の旅」五十四号は、文字通り唯一の追悼誌であり、木暮さんの全貌を知ろうために貴重な資料であるが、それにしても第二次大戦終戦を目前にしたこの年に、山の小グループがこれだけの大冊な会報をだしたというのは誠に驚きといわなければならない。もちろんその

口した路になったと思つたら、椎草裁培用のホダ木の上を歩いているのであつた。旧道へ入つてからは、歌などいづくに消えていた。リーダーも先にいってしまつて姿も見えぬ。安全とみるると、この人、風のようにとんでいってしまう。懐中電燈をだそうと思つたが、誰一人だす人がいないから、恥かしくてだせない。電燈の明るくともった著提の村はずれへ到着した時はヤレヤレと思つた。一緒に下りてきた七八人のわれわれが、真暗らな道端にたばりこんで休んでいると、村の人がとおりかかる。われわれの一人が「バス停はどこですか」ときくと、「二、三十分下だ」と答える。菩提の村へ着けば、すぐバスに乗れるものと心待ちにしてきたわれわれの期待は、見事外れ、みな、シユンとなる。「あんた方、どこからきた？」ときくから「林道のところの指導標で尾根を下りてきた」というと「ああ。あの道は今はおれな」とすげない返事。われわれは、通れぬ路を通らざれたわけである。村へ入って日はトッピー暮れ、くらしい夜道を、途中で路を聞き聞きヘトヘトに疲れてバス停についたのが六時半。バスで大栗野の町へ入ったときは、その明るさにまるで銀座へてたような錯覚を起した。

電車に乗つたら、猛烈に腹が空いてきた。スッキリコースは所要時間四時間半と書いてある。往復二時間の電車をいれても、午後三時には家に帰れる勘定である。「三時か四時には帰る」といとおいてきたから、家内は食事や風呂の支度をして待つてらる。だが、家まで、とてもちやうどない。横浜で途中下車して、三人で夕食を躊躇たべた。たべ終つて、やっと今日の実感がわいてきた。ああ、楽しかった。久しぶりでスッキリした気分になつた。いぬぬことではない。はじめから、

そういうえばスッキリコースと書いてあつた。今日やら「シゴカレコース」の同名異語のように思える。近頃の若い人の間で使われるスッキリという言葉はどんな風に意味づけされるか判らないが、とにかく字引をひいてみた。小学館の国語大辞典は「物事のすべにわたつていて、少しも残るところのないさまを表わす語」と説明している。富山房の国語辞典は「さっぱりしたるさま、未練なきさまにいう語」であり、大槻の大海には「奇麗、サツパリト。アツサリト。」とでており、新村の広辞苑は「さっぱりしたさま。洗練されて落ちついているさま。未練のないさま」と書いてある。どこから踏んでもこの言葉はコースの形容ではなさそうである。誰がつけたか知らないが、このコースの名付け親は、たいした心理学者に違いない。土曜会は毎週一回は開かれるが、集中登山は年に一回である。めつたに開かれないこんな楽しい山岳会の行事に、なぜもつと多くの会員がでてこないのか不思議だ。山行といふ会にあれだけ集るのだから、山行といふ山岳会だけやれる行事のこちらほもつと集つてきてしかるべきだ。それが集委會の絶大な好意に報ゆる、会員の当然の義務とも思えるのだが、いかなるものであろう。(終り)

足立正夫と近藤実

田口二郎

足立正夫、近藤実の両君が今秋(昭和四十九年)相ついで他界した。足立六十一歳、近藤六十歳。私たちは戦時、戦後の混乱期を通じてあまりにも多くの山仲間を失つたので、時には自分を生き残りみたいと感じる時があるのだが、幸い過去二十年、生き残つた者たちはおおむね健在で生き延びた。しるかに突如、仲間でも一番にぎやかな部類に属する二人が還暦を越したばかりで逝つてしまったので、無念やるかたない、というのが私の気持ちだ。足立も近藤も、私にむかつて、「では一足お先きに失敬！」とさり気なく立ち去つてしまつたような気がする。

近藤実の訃報が神戸の香月慶太さんから長距離電話で私の勤務先にといたとき、私は思わず絶句した。その日は十一月六日だったがたつた一週間前の十月二十九日に私は上京してきた彼と銀座でたのしく、談したばかりだったからだ。その場所は西銀座の旧電通ビルの裏にある山中というすし屋だが、彼の宿である銀座第一ホテルまで送つてゆくハイヤーのなかで、「今晚は楽しかったな、おたがいに年をとつたからときどき会おうや」と駄目を押し語りかけたからだ。

近藤が「ときどき会おうや」といったのは私たちは昨年の六甲山の会合以来、会つていながつたし、彼自身は医者だが三井金属鉱業の理事格に出世したときどき社用で上京しているのに、幽明境を異にする時がこんなに早くくるとはおたがいに知るよしもなく、私たちは彼の土京ごとに会う機会をもつたわけではなかつたから。三年ぐらゐ前のことだが、足立と二人で近藤を銀座に迎え、足立のハイヤーで三人で鎌倉に帰り、そのまま足立の長谷の家

に上がつて飲をつづけ昔をなつかしんだことがある。あれは晩春か初夏で深夜もあたたかく、近藤はワイ・シャツを脱ぎすて裸になつて、青年時代とすこしも変らなないボディ・ビルで鍛えた見事な上半身をみせた。そして昔なつかしいシェーベルトの「デー・ヴァンダラー」「漂亮人」をたい深いつバリエーションでドイツ語で歌つて聞かせたが、その声量も四十年前の甲南時代の彼と変らない力強いものだった。ただその時である。近藤が私たちに、俺は心筋梗塞をやつてなあ、と告げたのは、私たちの仲間誰よりもいつまでも若々しい肉体的容姿を保っている近藤に心臓の故障があるなどとは、私は信じ難いことだと思つた。

近藤が死ぬ一週間前に上京したのは、私用のためだが、その時を利用して会う約束をとり交わしたのはちやうどその三週間前の十月七日である。おたがいにせむいかわねばならぬという事件がもちあがつたからだ。その日、私は長距離電話で広島の竹原にいる彼に、その日の朝、足立正夫が死んだことを告げた。足立の最近の極めて憂慮すべき容態についてもちろん知るすべもなかつた近藤は、受話機のなかで、たちまち言葉につかえた。そして驚きと落胆をボンボン伝え、上京するから、その時に、足立の話しよう、ということに決つたのである。近藤との最期の別れとなつた銀座での数刻は、右に述べたように死んだ足立が手引きしたもので、若し足立が死ななかつたならどうなつていたらう。足立も私も、昨年の六甲山以来会わなかつた近藤とそのまま会はずじまいで近藤はあの世に行つたのかも知れない。あるいは足立が死ななかつたら近藤も死ななかつたかも知れない。

すし屋、山中で近藤は相変らず意気軒昂であつた。小さなすし屋だが、まるで私たちが買ひとつたみたいだにその夜は私客がなく私たちは無遠慮にしやべりまくつた。二回目心筋梗塞をやつたという近藤は、もともと昔から酒は飲めなかつたがビール小瓶一本をなめるようにして飲んでしたが、ドンドン煙草を吸うので大丈夫か聞くとい、とまるで他人ごとのように豪放らしくに笑い飛ばした。私が医者など初養生だ、という、人間の命など初めから決つていよう、と突っぱなし、「おい甲南時代が懐かしいなあ。想いおこすと、柔らかな緑や青や橙色の光を浴びて飛び廻つていよう若し俺達の姿が、映画のシーンのように芝居の舞台みたいに、しかも薄いヴェールを通してみる思いがある」と語つた。近藤はなかなかのロマンチストだった。

足立については、彼は甲南式のお坊ちゃんではなくアンビュシヤスな男だつたな、憲さん(伊藤憲氏のこと)と似ている面があつたな、と批評した。しかし、足立を申らつて、足立が若い時に好んだ歌を唄つてやろうということになり、「杜の牧場の深きみどり、忘れな草の花咲く頃、私の好きな羊飼、今日も必ず行くであろう」と二人で合唱し終つた時、近藤の目頭からも大きな粒がこぼれるのだった。

その夜の近藤の姿からは一週間後に死が待ち受けているなど想像もできないものだった。岡山医大でして一生が三井金属鉱業の医者として過して、会社の理事となり、最近では公害問題等で労資間に大きな発言力をもっているようであった。来年は英国エデンバラの学会にでる、といつていたが、まことに得がたいユニークな快男児だったので会社にも組合にも大きな信望を受けていたと十二分に想像される。友人

では昔のアナコ、現在の美津濃の社長水野君の友誼を受けている、といっていた。立派な社会的地位を得たのに、なぜか家庭は十二分でない、私とあって最後の晩でも、その点を露骨にアゲステに、まるで他人ごとのように突放して話している姿は、彼を心から愛している友人の胸には少し痛ましく感じられた。

近藤は甲南時代、大いに山に打ち込んだが、私を相手し、それも大抵は死んだ伊藤新一と三人で組んで、冬や春の鹿島槍を登った時の楽しくて、多くユーモラスな思い出をもっている。私たちはまだ十代後期の少年だったが、私たちのやった山登りは当時としては一級のものだった。近藤と私とは、単細胞さ、バカさ、無鉄砲さで相譲らぬものがあつたので、彼と組んだ山行は、想い出の中で、天を駆けるといったような雰囲気を保ち続け、怖いもの知らずの若い三人が雪や岩を下ドンドンのし上って行った、といった明るい画像が浮び上ってくる。近藤はなかなかのクラッグマンで、山口良夫と二人で前穂北尾根奥又側には、口に知られる甲南ルートを残している。

好漢近藤にもう会えないのは痛恨の極みだが、私の身辺をよくに淋しくさせたのは足立の死去だ。

十年前から彼は東京から鎌倉に移り、私の家から歩いて数分の同じ長谷に住んでいた。足立も私も勤人で忙しい身体だったが、土曜か日曜には「海岸を一廻りして彼の家に立ち寄り声をかけるのが長年の習わし」となっていた。足立の方も和服の着流しか派手なツイードを着て妻君を帯同し、なんの前触れなしで私の家の庭に入ってきた。

足立の長谷の家は、電通の前社長の別宅で、前社長が死んでから、足立が

会社から借金して手に入れたものだといふ。ちょっと奥まったところにある落着いた三十坪ばかりの二階建て鎌倉らしく猿すべりや紫陽花が庭にあった。そこを訪ねて行くとい彼はいつも(まったくいづも)ステレオを音響いっぽいに響かせて聴いて。そしてチビリチビリと日本酒を飲んでることが多かった。ドイツ古典の宗教音楽を何時間も何時間も聴いて倦まない男だった。その他、民謡とくにロシアかイタリーのものが好きで、いいなあ、いいなあ、と繰返して聞いていた。足立も近藤と似て若い頃から歌が好きだった。私たちの仲間にドイツ民謡、とくにシューベルトの冬の旅を流行させたのは近藤だったが、足立については私はつぎの思い出がある。

あれは甲南高校一年のころと記憶するが、二人で御影の海岸から沖合に停泊中の外国船にむかって、ボートで漕ぎだしたが、海面に躍り輝く強い西陽を体いっぱい浴びながら突然足立が声をかぎりにナポリのサンタルチアを歌いだしたその時の青春と力に満ちた情景が忘れられない。

高校時代の足立はなかなかの読書家で哲学が好きだった。ベルグソンなどで耽読していた。また物覚えがよく晩年まで、甲南時代に講義を受けたカーライルの「衣裳哲学」の名句を覚えており、後年電通に入社し局長となつての公席でのスピーチで、カーライルやベルグソンや果てはマルクス、レーニンなどの名や警句を引用して人を驚かせたらしい。

京大法学部に入って滝川事件がおこり彼は活躍したが、骨っぽいわりになかなか慎重な方で捕まるようなへまはしなかつたらしい。

足立は幼年時代をウラジオストックで過しているが、その異質な文化が足立の人間形成になんとはいえない

が、なんらかの影響を与えたような気がする。それに早くから母を失ったので、その多感な性格の中に、なにか寂しいもの、もの足りないもの、一途に無性なもの、無性に一途なものを宿していたな。

甲南時代、足立の家は住吉神社前を南に下がる道路に面したあまり大きくない二階建てで、そこに家事の世話をする婦人がいて、足立は、おばさんと呼んでいた。昭和六、七年の頃だ。私はその二階に他のクラスメートと集まって漢文の十八史略の試験勉強をしたり、近所に住む左官屋やタバコ屋の娘の動静をうかがったりした。

足立の家から私たちの住吉川沿いの魚崎の家まで歩いて何分かつたろうか、足がすり切れるように往復したこの路についてさういうのを覚えていないのも不思議だが、当時、時間の觀念なども合せていなかったのではないか。いずれにしても足立も私たちの家によくやってきたものだ。私たちは兄弟が多く、みな甲南だったので足立や他の少年にとっては格好の遊び場所でもあった。わが家の方針で食器はハイロー引きの鉄器だったが、足立もハイロー引きの鉄器でも賑やかな魚崎を好んでこのハイロー引きの鉄器によくバクついた。

当時、私たちが十七、八歳の頃は家も学校も芦屋のロックガーデンも一衣帯水で私たちがどこでも途方もなく際限もなくおしゃべりした。水のせせらぎを聞き、奥山に渡る山風を聞き、月光を浴びてロックガーデンにキャンプを張ったが、それはほとんど毎ウィークエンドのことだった。足立はもっとも古いその仲間のひとりだった。

昭和四年の夏尋常四年の時、湯川、多田(二人とも故人)と穂高や槍に登り、昭和五年の春には、湯川、田口一郎指揮の下に高校生としては画期的な

積雪期の穂高登攀を目標に横尾谷に雪中キャンプして行っている。高校二年夏の時、酒沢合宿のリーダーで、この時、近藤も参加し酒沢中心に多くの新記録を誕生させた。しかし足立の登山は近藤と同じように高校で終わっている。

足立自身はクライマーというよりマネージャー型でよく人の世話をやいた。戦後の貧窮の日本で親しい仲間が病に打ちひしがれていた。安井博彬もその一人だが得たで、戦後、戸塚の国立が戦時中病気で死んだ。奥さんが逃げてしまったので足立と私とでまことにつつましい淋しい野辺送りをした。

伊藤憲さんの東京の葬式も足立が世話をしして指揮をとった。同じカリエスで長年武蔵野村にふせり動けなくなつたが、それでもソ連のオペレーターの翻訳を世にだした山仲間の伊藤新一(取二文三君の兄貴)の共産党の葬式にも、足立の姿はみうけられた。

足立の人生はついに波瀾に満ちたものになった。戦後の野村合名が解体になったからである。それからの数年、電通に入社するまでは、時代も時代であったので、足立にとっては苦惱に満ちたものになった。

私は足立を私の朝日新聞からの転職先である岸本商店に引張ったが、ある事情があつてこれはうまく行かず、野村合名時代の兄貴分であり当時富士製鉄の重役としての田坂さん(現新日鉄副社長)の紹介で電通に入った。

要な仔会社の重役になり、今年の秋はその社長になる予定だった。中畑さんにその人物を深く愛されたからである。

長女を嫁がせ長男を自分代りに電通に入社させまた嫁もとらせ、次男も社会人にさせ、その上、死んだ妹の遺児を引きとって育て、嫁がせていた。昔気質で苦勞人の彼は大抵のことは済ませて、これからは妻君二人ですこし楽をしようというところだった。

三、四年前から足立が咳に悩まされた。私は気づいていたが、私も喘息だと思いついて。昨年になると横須賀線での車中で人がふり向くほどひどい咳込みをすることがあつた。それでも平気で酒を飲みタバコをふかしゴルフに興じていた。しかし今年の春から鎌倉の自宅に臥せり、私が八月下旬カナダの短期旅行から帰った日の翌朝、早速訪れたところ、体重を大変落して寝ていた。

その後間もなく病院に移つたが、九月十三日、松方三郎一周忌のパーティーで、電通の社長の中畑さんから、足立が生きて延びられないだろうことを教えられて驚き、早速病院にかけつけたが面会謝絶。扉を押して入室したところ、足立は力なく私に微笑んだ。リングルを打っていた。それから三週間後の十月七日早朝、長男の正君から私のところに「父は今朝眠りました。鎌倉に連れもどしました」と電話があつた。私の家からわずかの距離の彼の家にかけつけると、足立はいつものベッドの上で眠っていた。ひと廻り小さくなくなつて。しかし不思議に生きているようなよい血色をしていた。少年のころの面影をありありと蘇がえらせた死に顔であつた。ものいわなくなつた足立に對峙して私は慟哭した。

(49年11月16日)



小さな頂

一原 有徳著

一原有徳という名を知ったのは、私が十年ほど前三年間札幌に在住した末期であったため、遂に面晤の機会を逸したが、それを今でも残念に思っている。しかも、この人が北海道の山にかけてはタダモノでないのみならず、スケッチ、版画、俳句にかけても優れた才の持主であったと知るにおよんでは、なおさらであった。

昭和四十二年頃、会員石崎貞子さんに狩場山のことを書くように依頼したところ、同君の依頼を受けたという一原氏からたくさん資料が届き、それを基にして私が『狩場山雑記』を草した(『山岳』六十二年に掲載)。それから同氏が文通が始まったが、三年ほど前、同氏がスキーで骨折して以来山登りができなくなったとき、見舞状のなかに、これからは『アルプ』にでも大いにお書きになったら—とすすめたような記憶もある。

今度でた『小さな頂』には、それら過去に執筆したものを全篇にわたって加筆訂正し、著者数十年の豊富な経験をもまえ、北海道の山約七十座を、主に紀行文的な形でまとめ上げたものである。克明な登山紀行もあれば、著者の山への態度が随所にかがわられるものもあり、農山村開拓者への暖かい目ざしを示すものから、創作的な作品もあるといった具合で、北海道の山だけを

対象としていられるにわかならず、その内容はすこぶる変化に富み、微妙なニュアンスをさえ備えている。その上著者の得意とする版画、スケッチが随所にちりばめられているのも、読者に限りない楽しみを与えてくれる。

一原さんは、この本にも書いているように、少年時代非常な逆境のもとに山登りをはじめ、自らの力で山登りの道を切り開いた人である。それだけに青年時代の一原さんの山に対する情熱と気迫には、すさまじいものがあったことと想像される。巻頭の「武利岳」などに、よくそれが示されている。なかの団体に入って教えて貰わないと山登りができないと思っている人や、急にドカ雪に遭遇すると動けなくなっ

てヘリコプターを要請するような人々薬ではあるまいか。私自身の就後感を率直にいうなら、山の本で近頃このくらい感銘を受けたものはない。それは、多年風雪に堪えた巨木の切り口にみられる、あのおごりやかな年輪の美しさに警えられようか。装幀、造本も優れて、また本書刊行に協力した橋本誠二、林和夫、小枝一夫、山口透氏らの友情も美しい。菊判三五八ページ、一九七四年十月若溪堂発行、定価二、九〇〇円(望月達夫)

カラコルム

吉沢 一郎古稀記念文集

ヒンズークシユ・カラコラム会議は、一九六九年に吉沢一郎氏を議長として発足して以来、本年度で第六回を迎えて由であるが、本書は、一九七三年十一月六日に満七十歳を迎えられた吉沢一郎氏の古稀を記念して、諏訪多栄蔵氏を中心とした同会議のメンバーにより編集されたものである。

当初私はこの話を聞いて、吉沢氏の論文集成とばかり思っていたが、本書を手にしてみて、H・K会議同人の暖かい友情出演というか、横有恒氏の序文の言葉を借りれば、「温雅な企画」であることが知り、大変嬉しく思った次第である。古稀を記念した出版物は

少なくないが、本書のように、暖かい友情にとりかこまれた論文集成は珍らしいのではないかと思う。これも吉沢氏の人徳というか、日頃後輩の世話にされていることに対する素直な恩返しというか、ともかく素晴らしいことと思う。吉沢氏にとっては、まさに男冥利につきるという言葉があてはまるのではないかと想像される。

しかも内容は、いずれも力作というか、全力投球でまとめられたものばかりであり、その意味でも本書の価値は高く、この中のいくつかは、ぜひ英訳して世界の登山界に紹介して欲しいものである。

本書の内容は、横氏の序文、吉沢氏の感謝の言葉について八編の論文からなっているが、巻頭にある吉沢一郎氏の「I」カラコラムの課題、主としてカラコラム命名法の変遷、「II」カラコラム協議会報告(Karkoram Conference Report)が本書の根幹をなしており、「III」章以降をHKTのメンバーの論文が占めている。吉沢氏の論文「I」「II」については、編集後記で諏訪多氏が述べられているように、すでに三十七年前に原稿としてまとめられてあったものようである。もちろん全訳ではなかったが、「II」については福岡岳連カラコラム班有志の方の協力を得て全訳したものを採用したと

のことである。「I」「II」ともNomenclature(命名)とIdentification(山座固定)という二つのテーマを合併したカラコラムについての大論文であり、HKTの

方々が吉沢氏の古稀を記念してまとめられた論文集の内容として、まことにふさわしいものといえる。宮森常雄氏の「III」[I]a. 峰の周辺、H・J三十一巻(一九七二年)に掲載された、「サラグラール周辺の山座固定」とともに同氏の独壇上である。

雁部貞夫氏の「VI」レジナルド・ジョンバグの足跡は、ジョンバグの著書Kadrins and Glaciersの足跡を実際にたどり、そこをジョンバグがなにを考えた、どう歩いたかをたずねるのが本稿の主題であるとしている。三度チトラルの土を踏まれた、チトラルの理解者雁部氏にはじめてできた好著である。

高木泰夫氏の「IV」中央ヒンズークシユの植物相、松本征夫氏の「V」「ディリチ・ミールの地形と地質」はともに实地踏査をもとにした論文である。専門分野にわたるため、私どもには正しく評価しえないのが残念であるが、ともに大変な力作である。

最後の二篇はHKTとは直接に関係はないが、二人の筆者とともに吉沢氏の親しい友人であり、古稀記念のためにとくに執筆されたものである。吉永定雄氏の「VII」カシジロバのことどもは、タイソンの理解者であり、カシジロバ、ニストの足でも定評のある吉永氏が、自分の足で確かめたことをも基礎としてまとめたカンジロバ探検史であり、今までのこの地域での混乱をよくときほぐして整理している。登頂今一步というところで大阪市大隊に先を越され、頂をゆづったタイソンにはぜひ読んで貰いたい論文である。吉沢氏もタイソンの理解者の一人で、山溪や岳人にタイソンの業績を紹介しておられることもあり、古稀記念文集にふさわしい論文である。(吉沢氏による英訳が期待される。)

最後の薬師義美氏の「VIII」ネパールにおける初期の探検はバンドディットの活躍を主にした大作である。この論文に引きつづきカラコラム、ヒンズークシユ方面へと地域をひろげられることを期待してやまない。

第六回のHKT会議には、HKTのメンバーで、チトラルの当主、ブルハヌディン・カーン殿下を招待されたことを新聞紙上で知ったが、あきつづいてカンジロバのタイソンで、あきつづいてその道の先輩とかよく世話になった人に感謝する意味で、毎年一人くらいずつ招待できたから素晴らしいことである。幸いに、HKTは、吉沢氏を議長とした自主的に活動している素晴らしいグループであり、実力もある。今後の活躍を期待してやまない次第である。最後に申しのべたいことは、HKTとしては、ぜひヒンズークシユの Identification と Nomenclature、登山史の完璧なものをも、まとめていただきたいことである。吉沢一郎氏の健康と長寿を祈って、喜寿記念文集のテーマとしてはいかがだろうか。

A5判、二二二ページ、別冊地図四葉、一九七四年九月、日本ヒンズークシユ・カラコラム会議編、若溪堂発行、定価三、四〇〇円(松田雄一)

あとがき 女子エベレス隊が発見しました。健闘を祈ります。(小倉)

昭和五十年二月二十日発行
113 東京都文京区湯島一六六一
利根川商事株式会社ビル
発行所 法人 日本山岳会
編集代表 今西 錦司
山崎 安治
東京都区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

かんあおい

山下一夫著 <A 5判>定価2,600円

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年
日本山岳会東海支部

<B 5判430頁・カラー64頁>定価4,800円

シブトンの自叙伝 大賀二郎・
未踏の山河 倉知 敬訳

<A 5判440頁>定価1,900円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著 <菊判584頁>定価2,500円

森林・草原・氷河

加藤泰安著<A 5判482頁>定価1,500円

山の古典と共に

大島堅造著<四六判280頁>定価1,500円

雪山・藪山 川崎精雄著

<A 5変型判340頁>定価1,200円

我がスキーシュプール

麻生武治著<B 6判388頁>定価3,400円

昭和50年版

山日記

日本山岳会編
<A 6ポケット判>定価950円

山岳

日本山岳会編
<A 5判>
68年 3,000円
67年 2,500円
66年 2,300円
65年 2,000円
64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
総索引 1,000円

山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編
<A 6判126頁>1集240円・2集280円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編 <B 6判202頁>定価480円

日高山脈 北大山の会編

<菊判362頁>定価2,200円

吉沢一郎古稀記念論集

カラコラム

<B 5判200頁>定価3,400円

小さな頂

一原有徳著

<A 5判360頁>定価2,900円

原野から見た山

坂本直行画文集
<B 5箱入布特製本>定価4,200円

雪原の足あと

坂本直行著<B 5判206頁>定価2,800円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖
<A 変型208頁>定価3,600円

いろいろばた 南会津山の会

<B 24どり判320頁>定価1,900円

すこし昔の話し

初見一雄著<四六判400頁>定価1,200円

ブーテン感傷旅行

小方全弘著 <菊判280頁>定価980円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編 <A 5判350頁>定価900円

登山・スキー用具専門店

山の店

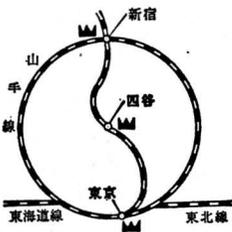
大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

- 買いやすい
山の店
- 北へ来たたら
山の店
- フレッシュな
山の店

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 **たかはこ**

なるべ、なんども
持たない方がいい
けやんも、どうも
要るものがある。
なほ人間ですから
えしてやん山とすかり

どうしても必要なもの
をこころえてまらる
ま責任はもこいます

かたるゴジュンテイ
でんや 281-28456
中央区八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京都・中央区銀座3-5-7 (561)3600 (567)9031
東京都・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曾根崎上丁4-7 (364) 0933 (代)
福岡店: 須崎町 1-4 (28) 3440



会務報告

支部長会議報告(昭49・12・6)
年次晩餐会にさき立ち、前日の六日午後一時から本会ルームで開催した。今西会長の挨拶のあと出席支部長による現況報告、織内副会長からつぎの議案について説明があり、質疑応答のち本件を了承した。

一、創立七十年記念事業について
理事会の試案について説明があり、今日の現状では、入金金、会費の値上げは止むを得ないとのことで了承した。その他、経常費の軽減を図るため、「山岳」「山」などの出版費の一部を自転車振興会、船舶振興会などから補助を受けられないのか、伊藤(北海道)、支部長会議は議決権はないが、定款または細則に成文化されておらないので、新しく条文を設けたらどうか、中田(富山)、山本(静岡)などの意見があった。

上高地山岳研究所利用状況

昨年六月オープンした山岳研究所の利用状況、期間中の収支は別表のとおりであります。初年度のため会員に周知されなかったこと、最盛期に長雨が続いたことなどもあり、利用者当年初の予想より下回りましたが、集会、青年懇談会、婦人懇談会などによる研究会も催され初期の目的を達することができました。なお、資金不足のため第二次募金を予定しております。

○利用者実態 49.6.10~11.4

Table with columns: 利用者, 月, 会, 員, 非会員, 合計. Rows for months 6-11 and totals.

※ 非会員は会員の紹介によったものである。

○収支報告 49.6.10~11.4

Table with columns: 科目, 収入金額, 科目, 支出金額. Rows for various categories like 利用料, 金料, 電話, 雑収, etc.

会告

事務職員に欠員ができましたので、勤務時間の都合上暫定措置としてルームの開室時間を当分の間左のとおり変更いたしますからご了承ください。

一月十日 理事会

毎週水、金曜日 午後十二時半
なお、月、火、木、土曜日は従来どおり午前十時

図書室便り

(昭和49・11)

- 前号の続き
(4)村山雅美著『南極観測隊よみがえる昭和と基地』講談社 昭和41
(5)辻直四郎著『インド文明の曙』ヴェーダとウパニシャッド』岩波書店 昭和42
(6)八代田貴一郎著『野草のたのしみ』朝日新聞社 昭和43
(7)諏訪多栄威等編『剣・立山・黒部』(現代登山全集 3) 創元社 昭和36
(8)岡田喜秋著『こころの山 ころころの旅』千代田書院 昭和28
(9)深田久弥等編『悲劇の山栄光の山』(現代の冒険 2) 文芸春秋社 昭和45
(10)福田宏年編『探検の記録』(現代日本記録全集 15) 筑摩書房 昭和45
(11)蠟山芳郎著『インド・パキスタン現代史』岩波書店 昭和42
(12)福沢武一・竹入弘元共著『木曾文学碑散步』 昭和45
(13)『スイス・オランダ・ベルギー』(世界の旅 13) 河出書房 昭和43
(14)中村謙著『山と高原の旅』朋文堂 昭和15
(15)伊藤秀五郎著『詩集・風景を歩む』東京詩学協会 昭和3
(16)明治大学体育会山岳部遭難対策委員会『遭難の実態 III』 昭和38
(17)『Indian Mount Everest Expedition 1965』
(18)中野好夫等編『世界ノンフィクション全集 1』筑摩書房 昭和35
(19)安川茂雄著『凍る山稜』三笠書房 昭和48
(20)安川茂雄著『立山ガイドの系譜』三笠書房 昭和47
(21)藤木九三著『岩の呼ぶ声』三笠書房

- 昭和44
(4)ジャック・オルセン著 青木枝朗訳『地獄への登攀』三笠書房 昭和49
(5)近藤等・安川茂雄編『山へのあこがれ』(われらの山々 1) 三笠書房 昭和47
(6)近藤等、安川茂雄編『山に入る日』(われらの山々 2) 三笠書房 昭和46
(7)近藤等・安川茂雄編『山の明け暮れ』(われらの山々 3) 三笠書房 昭和46
山崎安治氏寄贈
(1)日本山書の会『北の山と人』その登山史的展望』 昭和47
(2)松本高等学校山岳部『わらぢ』第三号 昭和4
購入図書
(1)山本茂実著『著作新道』ある北アルプス哀史』朝日新聞社 昭和46
(2)ベベ・セミエノフ著 樹下節訳『天山紀行』 ベースボールマガジン社 昭和33
(3)吉田武三著『北方の空白』北方圏における日本・ロシア交渉史』時事通信社 昭和45
(4)ヒマラヤ蝶蛾調査隊編『青いけしの国』講談社 昭和39
(5)深田久弥著『ヒマラヤの高峰 四』雪華社 昭和40
(6)串田孫一編『峠』有紀書房 昭和36
(7)RCC II編著『日本の岩場』グレイドとルート図集』山と溪谷社 昭和40
(8)簗益夫著『信州の天気のことわざ』長野県生活気象協会 昭和38
(9)辰野嘉代子著『女ひとりマッターホルンをゆく』読売新聞社 昭和41
(10)ジョイス・ダンシス等著 広瀬玲子訳『女だけのヒマラヤ』人文書院 昭和34
(11)早稲田大学ベリリング・アラスカ遠征隊『アラスカ・エスキモー』朝日新聞社 昭和43
(12)信濃毎日新聞社『信州百山』昭和45
(13)柳田国男『遠野物語』角川書店 昭和47
(14)牧野文子著『知らなかった美しいイタリヤ』理論社 昭和48
(15)牧田茂著『栃田国男』中央公論社 昭和47
(16)東京慈恵医大山岳部『Jook』No.5 昭和31
(17)『世界週報』Vol. 34, No. 33. (1965-11) 時事通信社
(昭和49・12)

- 新聞社 昭和43
(1)深田久弥山の文学全集Ⅷ ヒマラヤの高峰(中)』 昭和49
(2)石岡繁雄著『屏風岩登攀記』碩学書房 昭和49
(3)今西錦司全集(四) 生物社会の論理』 昭和49
(1)日本山岳会編『山日記75年版』若添堂 昭和49
(2)日本山岳会編『山岳第六十八年』日本山岳会 昭和49
定期刊行物受入報告
(部報・会報)
(1)日本山岳協会『山岳手帖75年版』
(2)日本山岳会編『会報』No. 301~330 合本
(3)日本山岳会東海支部『支部通信・東海支部報』64~72 合本
(4)東芝山岳会『芝浦山岳会史』 昭和49
(5)日本山岳協会『登山月報』 No. 67 (49-10)
(6)国立公園協会『国立公園』No. 301 (49-12) (雑誌)

- (1) 『ナルプ』 No. 203 (75-1)
- (2) 『山と溪谷』 No. 436 (75-1)
- (その他)
- 岩水信雄氏寄贈
- (1) 秩父宮雅仁親王文集『思い出の記』 昭和38 童星閣
- (2) 『登高行』XVII 昭和49 慶応義塾体育会山岳部

ルーム日誌

(49年12月)

- 2日(月) 集会委員会
- 3日(火) 青年懇談会「印度ヒマラヤ研究会」講師 浜野正男氏
- 4日(水) 学生部
- 6日(金) 文部長会議
- 7日(土) 昭和四十九年度年次晚餐会 於京王プラザホテル
- 10日(火) 青年懇談会
- 13日(金) 図書委員会
- 18日(水) 学生部
- 20日(金) 第三一六回小集会 忘年会
- 23日(月) 集会委員会
- 24日(火) 青年懇談会
- 25日(水) 会報編集委員会 十二月中来室者 三二六名

第三回山岳史懇談会

左記により第三回山岳史懇談会をひらきますので、ふらつてご参集下さい。

日時 三月十九日(水)
 場所 日本山岳会ルーム
 テーマ 松高山岳部の記録
 講師 今井田研二郎・沼野洋一氏ほか(主催・図書委員会)

東海支部出版物のご案内

東海支部では左記の出版物を販売いたしております。ご希望の方は前金でお申込み下さい。値段はそれぞれ一冊につき送料込みで左記のとおりです。

記

- 「東海山岳一号」 一、〇〇〇円
 - 「東海山岳二号」 一、〇〇〇円
 - 「合本海外登山研究会資料I~IV」 八、〇〇〇円(残部僅少)
 - 「合本東海支部報I~III」 二、〇〇〇円(残部僅少)
 - 「北壁(原武遺稿集)」 三、〇〇〇円(依託販売)
- 申込先 千四六六名古屋市昭和区鶴舞四一六一七グリーンハイ
 ツェーノ池沼慧方日本山岳会東海支部